XIV

ド　　ヤ

表 1　ホテル・旅館業等の施設数の推移

	施設数				客室数		
	ホテル	旅館	簡易宿所	下宿	ホテル	旅館	下宿
1950（昭25）	55	39,019	—	2,760	—	—	—
1951（〃26）	64	41,918	—	2,329	2,582	300,360	16,683
1955（〃30）	114	54,285	—	3,576	5,690	402,782	27,011
1960（〃35）	147	62,194	6,605	2,416	11,292	508,817	18,946
1965（〃40）	258	67,486	11,569	2,333	24,169	608,349	17,721
1970（〃45）	454	77,439	19,597	2,453	40,652	763,091	21,691
1976（〃51）	1,269	82,724	26,454	—	119,672	916,817	—

（備考）厚生省統計調査部，各年次年末現在。ドヤ，ベッドハウス，山小屋，民宿等は「簡易宿所」にふくまれている。

表 2　宿泊施設利用率（1971年）

	軒数	総収容人員（最大収容能力）	利用率（%）（全国）	（東京）
ホテル	739	117,923	51.6	57.5
旅館	58,436	2,113,760	30.2	43.7
寮・保養所	4,642	188,062	20.1	—
ユースホステル	526	36,369	34.9	19.4
国民宿舎	442	46,757	28.7	54.5
民宿	15,980	446,420	6.4	12.3
（総計）	80,765	2,949,291	31.2	46.7

（備考）日本観光協会『宿泊施設統計』1973.5より。総サンプル80,765 軒，抽出サンプル 36,073，有効サンプル 17,599，回収率48.8%。そのうち，東京は軒数4,414（全角の5.5%），収容人員145,774（4.9%—但しホテルは26.6%）である。

ド　ヤ

「ドヤ」という言葉は、「宿」をさかさまにした隠語である。簡易旅館で、旅館業法では「簡易宿所」と規定されているものである。一時的な寝泊りの設備である。

本書の第Ⅰ分冊で「ねぐらずまい」にふれたが、ここにとりあげるドヤも一種の「ねぐらずまい」である。ただし、人びとがそこに定住するのではなく、一時的に寝泊りするすまい——必ずしも簡易宿所に限らず、宿、会所、旅宿あるいは娼家といったものもとりあげたい。

人を宿泊させる施設の営業は、旅館業法（一九四八年法律第一三八号）によると、「ホテル」「旅館」「簡易宿所」および「下宿」にわけられている。ホテルは洋式の設備・構造をもち、一定規格以上の客室を一〇以上もち、暖房、浴室またはシャワー、各室付きまたは男女別の水洗便所をそなえたものをいい、旅館は和式で五以上の客室をもつもの、簡易宿所は多人数で共用する構造・設備を主とするもの、下宿は一ヵ月以上の期間を単位として宿泊料をうけるものとされている。

厚生省の統計によれば、これらの施設の軒数、所有客室は表1のようになり、下宿は低滞しているが他の施設は施設数・収容力を年々増加させている。

旅館業法にいう狭義の「旅館」はもとは「宿屋」といわれていたものを指し、旧い伝統をもっているもので、施設数でも客室数でも宿泊施設の中核をしめている。しかし第二次世界戦争後、就寝空間のプライバシーを求める感覚がいちじるしく国民の中に強まってきたのを反映して、以前はルーズであった和風の旅館でも客室をキチンと閉じられる空間に区画するようになってきたが、一定の規格をもち、部屋の独立性の高いホテルの方が特に若い層に好まれるようになり、表にみるようにホテルの増加率の方が高くなっている。

戦後、国民の余暇時間の増大、観光レクリエーションへの要求の高まりに対して、ホテル・旅館のほかにより安価で宿泊できる公的な施設としての国民宿舎や、企業・組合などの寮・保養所、さらに地方の農・漁家などが自宅を提供する「民宿」がふえてきた。一九七一年の日本観光協会がまとめた宿泊統計では、これらの施設の容量と利用率は表2のようになっており、依然圧倒的に「旅館」が多いが、寮・保健所や民宿もかなり伸びてきている。しかし利用率からいうとホテルが最も高い。また地区別にみると、地方から人の集まってくる東京が、一般住居の補完的役割を果たしている場合も多く、量からいっても比率からいっても、最も多い。

カット　釜ヶ崎ドヤ街の広告。ただすべり込んでもぐるだけのベッド・ハウスが多いなかで，「ヘヤの中に立てる」のが宣伝文句になった時代があった（1968年の街頭から）。

図 1　中山道和田宿脇本陣絵（大熊喜邦『東海道宿駅とその本陣の研究』1942.11 より）

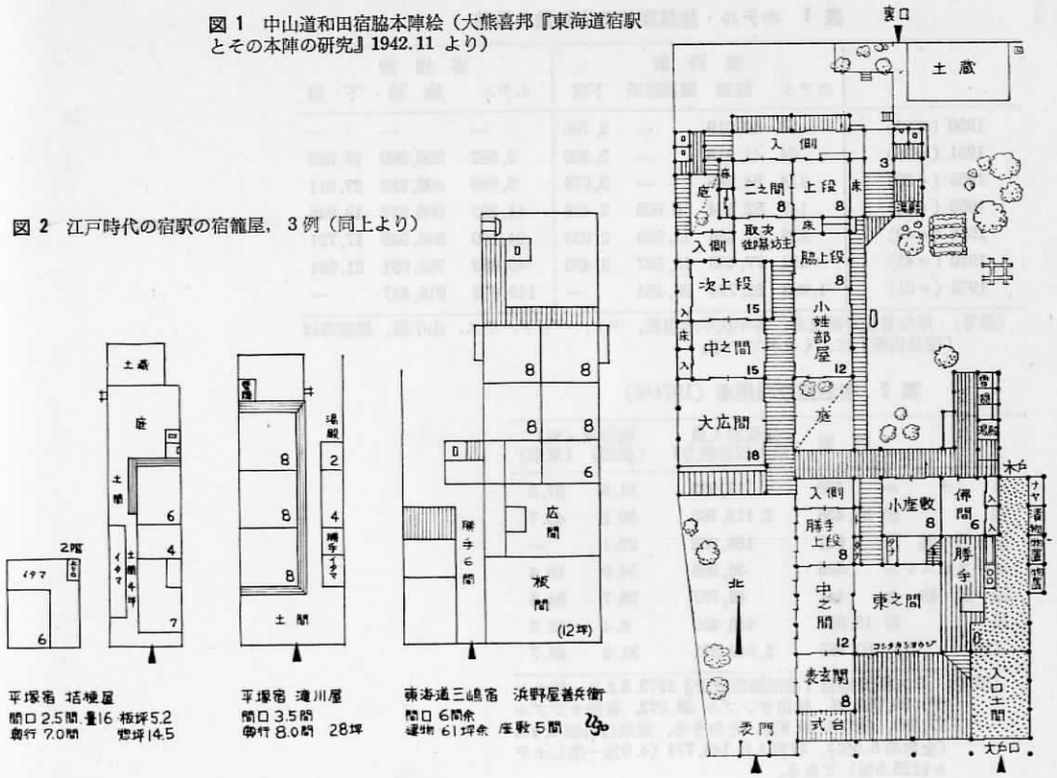


図 2　江戸時代の宿駅の宿籠屋，3 例（同上より）

ホテル・旅館、簡易宿所の中の国民宿舎・ユースホステル・寮・保養所・山小屋避難所・あるいは民宿といったものは、いずれも居住地をはなれた旅行中の一時的な宿泊所で、住居の延長あるいはその変種ともいえるが、ここではとりあげない。これに対して木賃宿の流れをくむ簡易宿所の「ドヤ」は、一時的な滞留者や不安定な業務につく低収入層の宿泊所で、収入・就業の不安定のために住居をもつことのできない最底辺層の住居ということができる。

本章ではこのドヤを中心におき、その源流をさぐるため旅宿の歴史にふれ、ついでこれら宿泊施設の中で日常の住居に欠けた機能を補完する、住居の延長のような一時的宿泊施設にふれ、最後に一部の階層にとって定住に近い住居として使われているドヤの現況を明らかにしたい。

ドヤは低賃住居であるばかりでなく、さまざまな問題をもち、時に居住者の不満が爆発して騒動がおこっている。その状況を完全に解決することが必要であるといわれている。ドヤの住人の中には、そのような社会的・経済的条件ではなく、ドヤ生活の「自由」を求めているのだと主張するものがあるが、状況がそのように改善されれば消滅してゆく居住形態といえよう。しかしそれを食い物にして利益を得ているさまざまな存在の力をはねのけ、労働者が主体的にこの状況を改善するまでには、まだ若干の曲折が予想される。その変貌・変遷ははげしいが、日本のすまいの最底辺によこたわる特殊な住居型として、その実態に注目したい。

旅　宿

宿屋＝旅館は日本では旅行が大衆化しだした江戸時代の中頃から、旅籠屋としてあらわれてくる。すでに律令時代に街道上の諸所に人馬をつぎかえ、宿舎・食糧を供給する駅制が生れているが、貴人は旅先ではその土地の首長や、豪族の館に客人として泊まったし、下人は社寺・民家の軒先をかりるか、野宿をして旅をし、人を宿泊させるのを業とするものはなかった。したがって旅館という形式の特殊な「すまい」の形式もなかった。しかし徳川幕府の成立ののち、五街道を整備して人馬をそなえる伝馬制とともに宿駅をもうけ、幕藩関係の公用に用いる本陣のほかに庶民のための旅籠や木賃宿がつくられるようになった。三百年の間に国内商業も発展し、幕府から命じられた諸大名の参勤交代のための旅行から、庶民の大師講や伊勢参りといった信仰、あるいはレクリエーションのための旅行がさかんになるにつれ、街

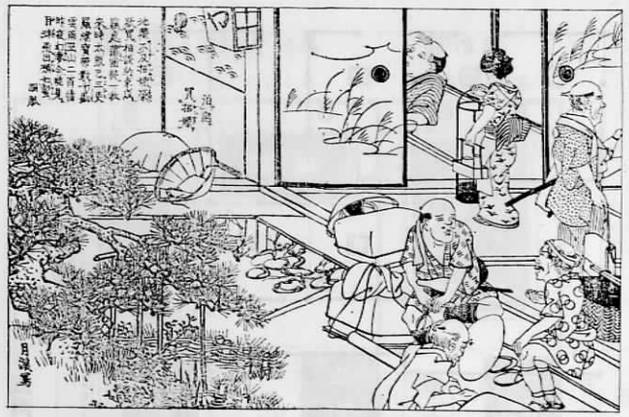


図 5　関の宿（『東海道名所図絵』1797，竹原春泉斎画より）

図 3　宮の宿の弥次喜多とあんま『東

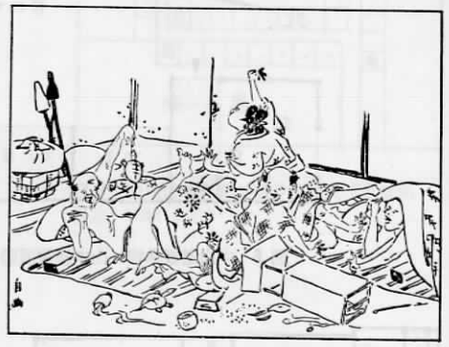


図 4　三島の宿の夜中のさわぎ（図 3 とも『東海道中膝栗毛』より）

道の宿駅や、社寺の門前には旅宿が繁盛することとなってきた。大名などの泊まる宿駅の本陣、脇本陣（図1）は大きな構えをもち、その正客室は上層武士階級の臨時のすまいとして、書院づくりの構えをととのえていたものが多い。大熊喜邦博士の『本陣の研究』[1]によると、最盛時の東海道五十三次には総計して本陣一一一、脇本陣六八、旅籠二、九〇四軒があったという。しかし、弥次郎兵衛・喜多八といった庶民の泊まる旅籠屋は、出入りのために玄関・庭先を大きくし、泊り客の宿泊に使えるよう、畳敷きの座敷を数室ならべただけのものである（図2）。それぞれのヘヤはフスマで仕切られ、縁側・廊下などと紙障子で区切られた程度のもので（図3～5）、客が多くなれば相部屋への追い込みは当然のことであった。ひとり安心して寝るといったプライバシーは無論なく、相宿（あいやど）のもちものをねらう「枕さがし」が何時あらわれるか油断がならず、ほんの旅宿のユメをむすぶだけの「ねぐら」的空間を旅人に提供するものであった。図3は『東海道中膝栗毛』にでてくる宮（熱田）の宿屋で、説明的に間のフスマは開けられているが、隣のヘヤとはこうしたフスマで区切られているだけである。

この種の旅宿には「めしもり」といって、客に食事や身のまわりのサービスをするだけではなく、夜の伽にでる女がたいていいた。旅宿のむらがっている宿場や門前町は遊興の巷でもあったが、その宿のねぐら空間は、さきに述べたものとほとんど同じである。図4は三島の宿で、弥次・喜多が夜中に追い出たすっぽんに大さわぎをしている間に、相宿の男から寝床の下に敷いてねた胴巻の金を小石にすりかえられるさわぎの挿し絵であるが、三人の男は一つのヘヤに泊まっているし、弥次郎兵衛・喜多八はそれぞれ女郎とねるのだが、彼らと相宿の者とをへだてるのに二枚折りの小屏風がたてられているだけである。こうした生活がきわめて開放的であったことは、現代の常識からするとおかしく感じられるが、ついしばらく前までは、日本人はそのような感覚で生活してきたことを思いだす必要がある。

（1）大熊喜邦『東海道宿駅とその本陣の研究』、一九四二・一一。

女郎屋

図6は中山道板鼻宿の宿場女郎屋・山本楼の豊島力雄氏による推定復元の間取図[1]である。板鼻宿は一八五二（嘉永5）年の書留によると、惣家数三四七軒、人別一、五四九人で、本陣一、脇本陣一、問屋二となっており、一八四二（天保13）年の調べでは三五〇軒中、普通宿屋七（うち一は中馬商人宿）、食売宿屋四一軒、普通下女一

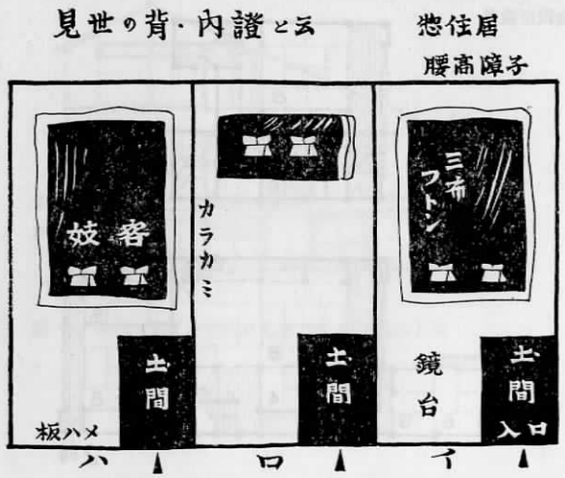


図 9　局見世の内部（同右），矢印は入口，見世の奥の方は「ないしょ」といって住居になっている。

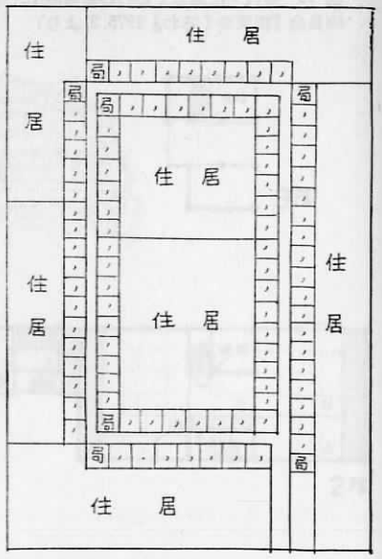


図 8　局見世の配置（喜多川守貞『近世風俗志』1853 より）

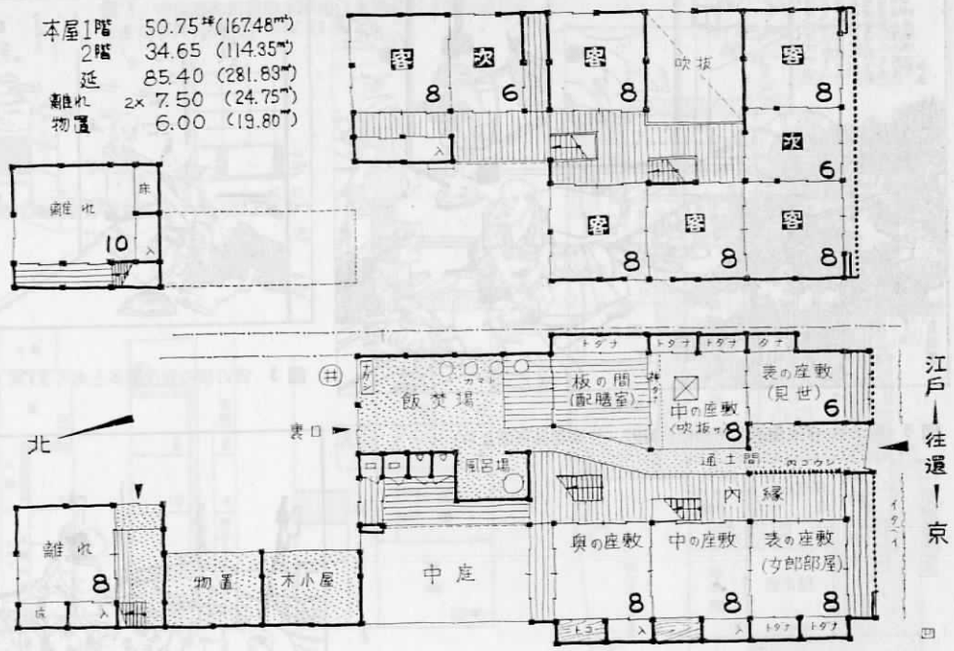


図 6　中山道板鼻宿・山本楼復原図（豊島力雄「宿場女郎屋の考察」，『前橋市立工業短大研究紀要』1971 より）

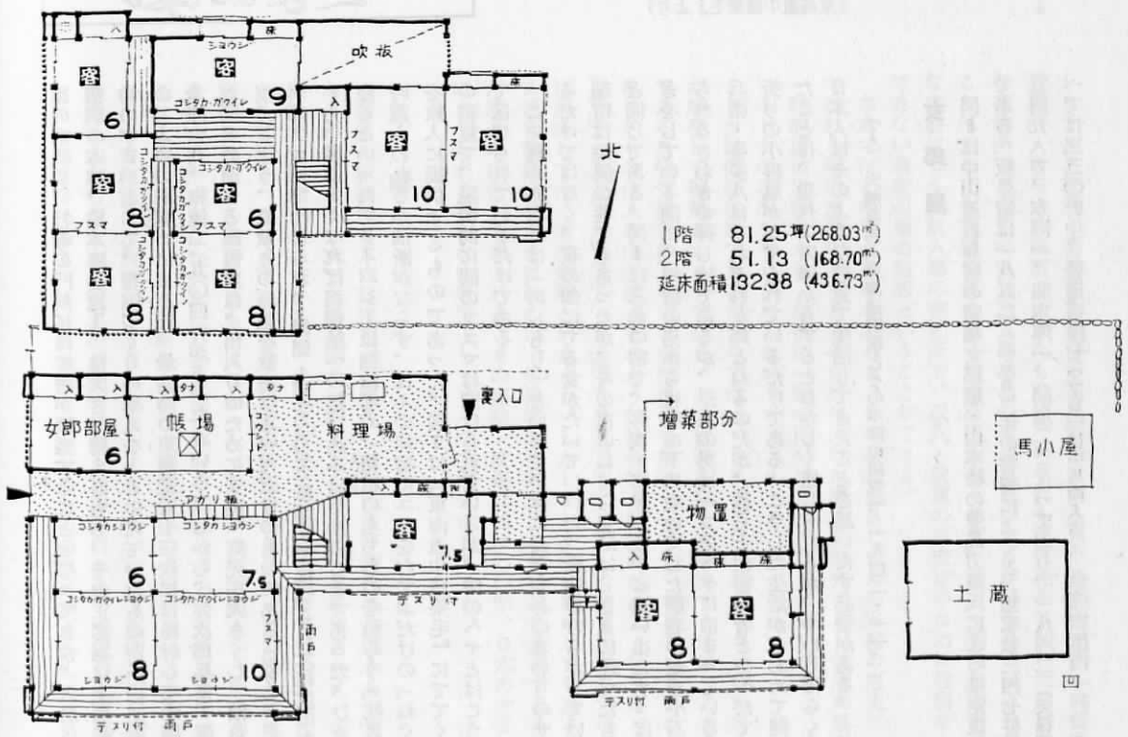


図 7　上州一之宮・坂町，丸叶屋復元図（豊島力雄「門前女郎屋の考察，群馬橋の場合」，『同上』1970 より）

○七人（うち七割は食売下女と思われる），食売下女八二人（食売は一軒に二人と限られていた）となっており，食売女をおかぬ中馬商人宿一軒が間口八間で，六間以上が七，五間以上一三，四間以上一二，三間以上一五となっており，一七一六（享保元）年頃には宿屋の大が一一軒，中が二六軒，小が二三軒となっていた。現在ほとんど遺構をのこさないが，今残っている山本楼は一八四〇年ごろの建築といい，宿場が全盛のころ一六人の食売女がおり，一八九〇年（明23）どろまで食売女をかかえて宿屋を営んでいたという。同時期に調査した坂本宿では，間口の広いものでは二列中廊下づきの土間型，向い座敷つきの二列中土間型，狭いものでは一列土間型[3]といった形のものがあり，図6は必ずしも代表的な平面とはいえないが，中廊下・中土間型である。客室は二階に九室あるが，割合に採光は留意されている。八帖の間が主である。

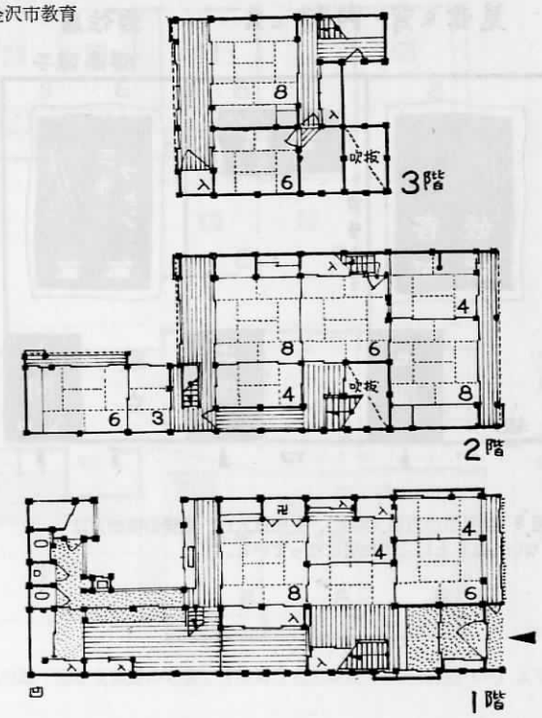
図7は同じく群馬県・一之宮の貫前神社の門前町で，高岡から下仁田をへて信州にいたる裏街道として栄えた坂町（通称お女郎坂）の女郎屋・丸叶屋の，同じく豊島氏による推定復原図[3]である。

江戸時代の遊女屋は客を一日一夜以上とめてはならぬことになっており，家作は質素につくるよう幕府からきびしく規制されていた。室数一六，一二六帖をもつこの丸叶屋は最も規模の大きい方に属する。一八七七（明10）年の検査名数簿によると，丸叶屋は娼妓六名をかかえていた。客室は離れと二階で一〇室ある。一〇帖が二間，他は八帖が多い。第二次世界戦争後，公娼廃止で農業にかえり，二階は間仕切や柱をとっぱらって養蚕室にしているが，図はこれを復元したものである。二階の表は格子になっているが，敷地がひろく，都会の建物とちがって各室は開放的，廊下でヘヤをとおらず往来できるようになっているが，隣りとの間仕切は大きく使うことを考えてフスマになっている。

調査した女郎屋七軒の集計では（客室以外もふくまれているが），一軒当り一〇・三室，八帖以上が五一％あり，四帖半以下は一三％しかない。東海道藤沢宿の例をみても八帖以上は七〇％をしめる。室の大きさは案外大きい。客の混む時は，むろんこれらの部屋は「おいこみ」の雑居で使われた。宿の手代，番頭たちは，客をうまく詰めこむのが腕のみせどころであった。

(1) 豊島力雄「女郎屋考――宿場女郎屋の考察（中山道その一）」『前橋市立工業短大研究紀要』第五号，一九七一・一二。
(2) 同「同――『門前女郎屋の考察』群馬県の場合」『同』第四号，一九七〇・一二。
(3) 一列，二列というのは間口方向に並んでいるヘヤの区画数，土間，中廊下というの

図 10　金沢・旧東のくるわのお茶屋(1)，平面図の一例（金沢市教育委員会『旧東のくるわ』1975.3 より）



はその列に土間、中廊下などが加わっているものを指す、第Ⅰ分冊「町家」の章参照。

局見世

一夜の休息をするための「ねぐら」ではなく、男女のいとなみをするための「ねどこ」空間を最も大規模に集積したものが、遊女屋・青楼である。

江戸時代になって、都市が雑多な庶民の集中する場所となってくると、貧乏や不幸のため売られて来た女たちをきびしく拘禁して春を売らせ、それで金をもうける女郎屋が方々にあらわれてきた。幕府は市民の生活を統御する目的で、そうしたものを一ヵ所にあつめて営業させたが、これがくるわ・遊廓である。そこにいびつな遊興文化の花がさいたのであるが、官許の遊廓の代表的なものは江戸の吉原、京の島原、大阪の新町である。そのほか「いろまち」・岡場所・悪所といわれた売春の巷が沢山あった。こうしたところの娼家にも、旅宿と同じくピンからキリまである。高級の旅館や、娼家は「ねぐら」ということばには少々ピッタリしない所があるが、その最低のものとなると、一時的な「ねぐらずまい」――正確にいうと「ねぐらやど」といわねばならないかもしれない――の一つの典型を示すといえる。むろん売春婦にもピンからキリまであり、最低のものは、その「やど」も屋外・川岸の土蔵の蔭や床下といった場所をつかっている。喜多川守貞の『近世風俗志』には、やはり最低の「ねぐら型」といえる岡場所の長屋の構造が図示されているので、それを紹介しておこう（図8）。

ツボネ（局）・局長屋・切見世あるいは略して「長屋」といわれる局見世は、最下級の女郎部屋である。その一画の構えのまわりを「朝鮮矢来」といわれる竹垣でかこみ、入口は一ヵ所または二ヵ所、その路次口には鉄棒をもった路次番がいて、客がたちどまって道をふさいだりすると「さあ口わろ、口わろ」といって追いたてる。路次はせまく、両側に局がある場合は混雑しないように、路次をひろくして間に板塀をたてるというから図8とは少し模様がちがうらしいが、一棟の家が数戸の局を路次に面してならべている。それぞれの局見世は間口四・五尺（一・三五m）、奥行一間半（二・七m）ほどの最小限空間（三・八五㎡、二人で寝れば一人当り一・九㎡）である。それも紙ふすま一重で仕切られているだけで、男女二人の寝る空間は視覚的プライバシーを確保するだけである。前面は間口四・五尺のうち二尺（六〇cm）くらいの入口があり、中にちょっとしたふみこみの土間、その横の羽目板ばりの内側には鏡台・化粧道具などがおいてある。お客がいない時は入口の方を開けてフトンを図9の中央のようにたたんでその上にマクラをおき、妓はすわりながら客を待ち、あるいは戸口にたって客を強引によび入れる。客があると戸をふさぐ。泊まり客には夜着を出すが、一切りの遊びの客には敷布団だけで上をおおうものはない。店全体が営業をおわる「惣じまい」の時は紙ふすまが全部が開けはなたれ、区画は消える――というのである。江戸にはこうした岡場所の長屋が当時一四ヵ所あったという。これに似た形式の娼家の「ねぐらやど」、あるいは単なる「ねどこ」というべき形式のものは、つい戦前まで東京でもみられた。

局見世に限らず、格のある青楼でも、一つの部屋を屏風で仕切っていくつもの床をしいて席を設けることがある。「割床」あるいは「割部屋」といった。屏風は随所に移動できる便利な間仕切りであるが、視線をさえぎるだけのもので、むろん隣客の「むつごと」や「いさかい」がよくきこえる。しかしそれで用が足せていたし、むしろ客の遊びの気分をかきたてたといえるかもしれない。

図 12　金沢・東くるわのお茶屋 (3)，断面図の 1 例

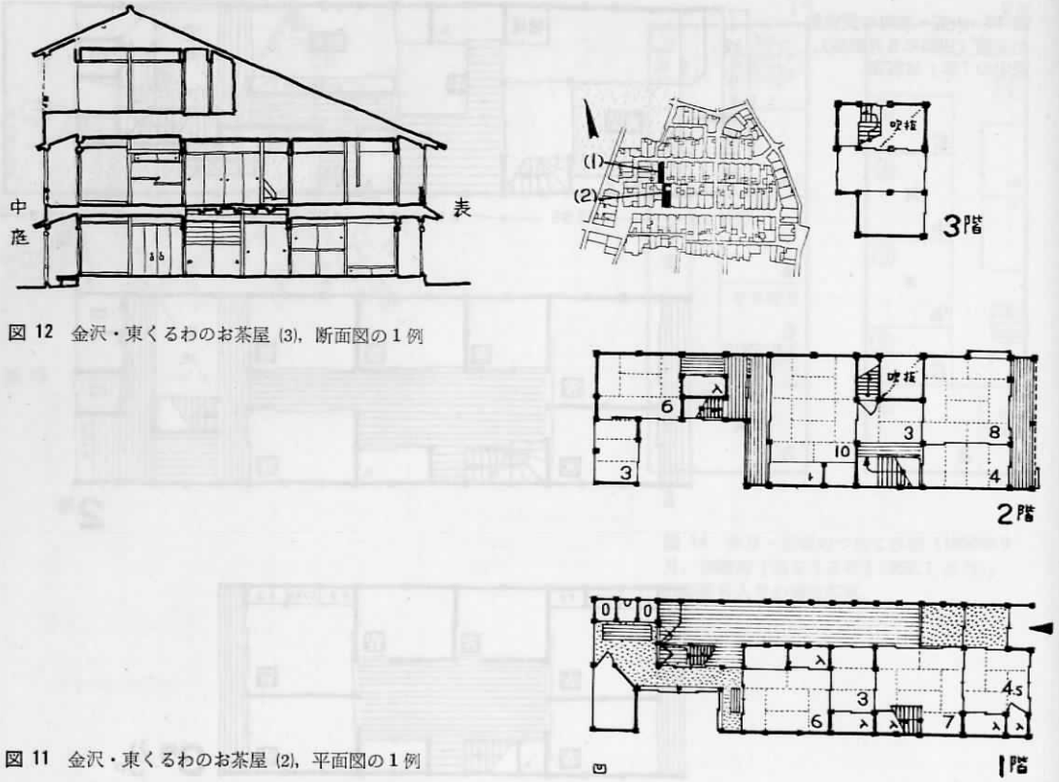


図 11　金沢・東くるわのお茶屋 (2)，平面図の 1 例

お茶屋

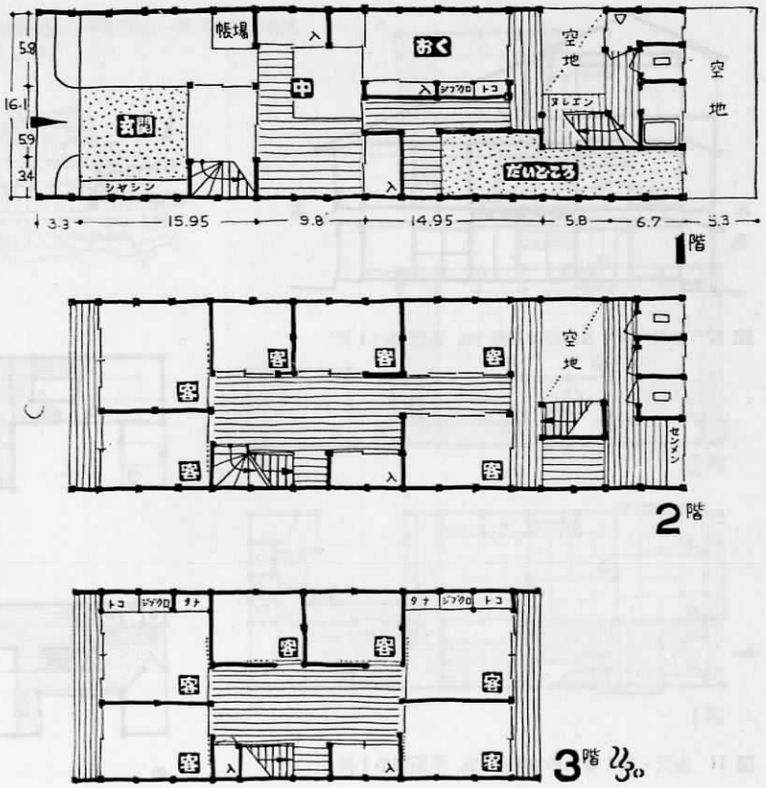
図10・11は「旧東くるわ」といわれた金沢市の茶屋町の代表的なお茶屋の間取りの二例である。

加賀百万石の城下町・金沢で遊里が免許されたのは一八二〇（文政3）年のことで、浅野川の外、卯辰茶屋町は一町四方ほどの土地を囲って、従来の町割りとは全く別の廓がつくられた。茶屋には上中下の三通りがあり、女の値段も五通りあって、いずれの茶屋にも抱えおくことができたが、座敷をつとめるのには等級がきめられていた。一八三一（天保2）年に一旦廃止されたがその実はあがらず、一八六七（慶応3）年に東新地と名をあらためた。七二（明治5）年の人身売買の禁で抱女は「解放」されたが、翌七三年から貸座敷・料理の看板をあげて営業が公認された。七九（明12）年の金沢全市内の娼妓貸座敷業は一一三戸、芸妓四七九人、娼妓一〇五人であった。第二次世界戦争後まで営業をつづけ、繁栄した。

細い格子をならべた一階の上に背の高い開放的な二階座敷の戸障子のならぶ独特の家作は、古い時代の姿をのこす町並みとして金沢市の伝統的建造物群保存地区になっている。図は一九七四年の平井聖教授らの調査[1]によるものである。

茶屋の間取りは、大きいものは五間以上あるが、大方は図11にみる通り三間程度の間口で、二列に区画され、片側一間幅の列は大戸のある格子戸の出入口の内に奥行一～一・五間の「たたき」があり、その奥に更に格子戸がある。それを入ると正

図 13　大阪・新町の貸座敷の平面（1935年8月新築）。図中の「客」は客室。



面に漆塗りの階段があり（図10）、その裏（奥）に台所、さらに風呂場、便所などがつづくが、普通の町家のように上り口のワキの茶の間の壁ぎわに階段がある場合もある（図11）。茶の間の表側、通りに面する仕度部屋が店の間、奥の方は床の間・仏壇などのある奥の間である。板張の部分は普通の町屋のようにもとは通り庭であったが、このように改造されたらしい。通り庭と茶の間の境にイロリがあり、煙出しのため二階の踊場はもと吹抜きとなり、越屋根をとっていた。普通の町屋では二階の表側は低く閉鎖的であるが、客座敷を多くとるため階段から上った二階の踊り場、中の間を中心として「前二階」と奥の広間とがいずれも床の間を設けた客間となっている。一九〇八（明41）年に防火上板葺が禁じられたが、傾斜のつよい瓦葺に改造する際、図12のように三階にも客間を建てましたものがある。間口の広い家では前の間も奥の間・広間も二列にわけ、また奥に通る廊下を設けて台所や風呂場の上に数寄屋風の「離れ」をとる。二階座敷から一階奥の便所に通じるよう裏階段をとっているものが多い。一般の町家とくらべると、上足生活が中心になっており、できるだけ通り抜けのない独立した客室をとろうとするのが、この型の住宅の特徴である。しかし間仕切は続き間に使えるようフスマで大きく開いている。現代的な感覚からすると音はつつぬけで、完全なプライバシーを守る客室とはなっていない。

（1）『旧東のくるわ――伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告書、金沢市文化財紀要・六』、一九七五・三。

つれこみ

一組の男女にとって、局見世のようにほんの一時的な「ねぐら」となる空間は、全く最小限の大きさをもつ空間をヘヤとしてならべただけでもいいわけである。

図13は戦前（一九三五年）に建てられた大阪新町の廓のうちにあった一軒の貸座敷業者、つまり女郎屋の間取りである。木造三階建の二、三階に一二区画のそうしたヘヤをとっている。その中の四室は全く外気に接していない密閉されたヘヤである。しかし居室ではないので、これは法律上ゆるされていた。ただし密室といっても、出入口はフスマ間仕切で、きわめて開放的である。けれども、前にみた金沢のお茶屋にくらべると、ずっと独立性・閉鎖度が高まっている。

戦後、公娼制度がなくなり、売春が禁止され、各地の花街はそれぞれいろいろな形で転換した。しかし、「特飲街」という形でながく公娼時代の区域がのこり、風俗営業取締法の線にそってカフェー（東京）、料理屋（福岡）、待合（山口）、お茶や（京都）、あるいは「特殊下宿」といった名で、「自由恋愛」という名目のもとに売春が残っていたことも事実である。

図14は一九五〇（昭25）年に売春で摘発された東京・新橋のある旅館の間取り略図[1]である。当時新橋西口通りから浜松町にかけて二〇〇軒をこえる「つれこみ」の専門旅館がならび、その八割までは駐留軍等の外人相手の「ハウス」であった。表向きは旅館のこの家の全く外気に面していない幾つかのヘヤ（そのうち×印のヘヤは九月二五日の警官のふみこみで売春行為が摘発された）は全く「ねぐらやど」にしか使えない。しかしそういうものとしては結構充分な「空間」であることがわかる。少し格は下がっているが、前にあげた新町の貸座敷と全く同型の間取りである。

そのルーム・マネーは、一九五〇（昭25）年当時の物価を念頭において考えてもらわねばならないが、次の通りであった。

	ショート・タイム	オール・ナイト
3　帖	三〇〇～四〇〇	八〇〇～一、〇〇〇円
4帖半（3、4、6、7号）	四〇〇～五〇〇	一、〇〇〇～一、一〇〇円
6　帖（1、8号）	四〇〇～五〇〇	一、〇〇〇～一、三〇〇円

ロングタイム――二～三時間は一時間につき一〇〇円まし。
ビール、通しつき二〇〇円、小もの（略）。

ただし日本人の場合は直接あるいてやってくるから、ポン引きの手当にあたるリキシャ・マネーがいらぬので、これより一〇〇～二〇〇円割引きという相場であった。

（1）神崎清『娘を売る町――神崎リポート――』、一九五二・一。

バンガロー

この種の系統の「ねぐらやど」として注目されるものに、サカクラゲといわれる♨マークのつれこみ宿がある。こうしたものが各地で建てられだしたのも戦後の一つの特徴といえようか。バンガロー風のものから、豪華なホテルをしのぐデラックスなシャトー風のものまで、いろいろできている。

戦争直後、岐阜の高山に旅行したとき、町からみえる小高い丘の山肌に小さな一坪半くらいの小屋が沢山たてられていて、遠目にわかるように♨マークの看板が立っているのをみておどろいた。こんな所に温泉がでるとは思わなかった。しかし日本の各地の温泉はたいてい遊興の街と結びつき、♨マークは湯につかって楽しむよ

図 15　六甲山のバンガロー，木造・鉄板葺（1952年）

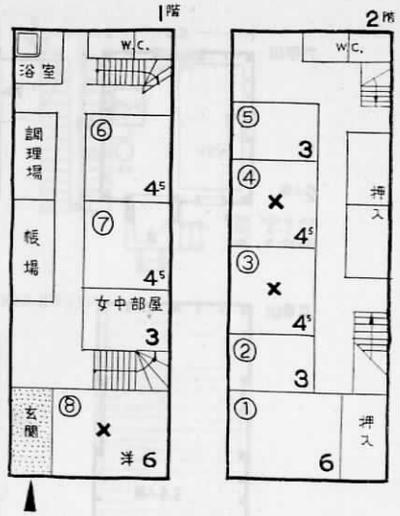


図 14　東京・新橋のつれこみ宿（1950年9月，神崎清『娘をうる町』1952.1 より）。○印番号入りの室は客室。

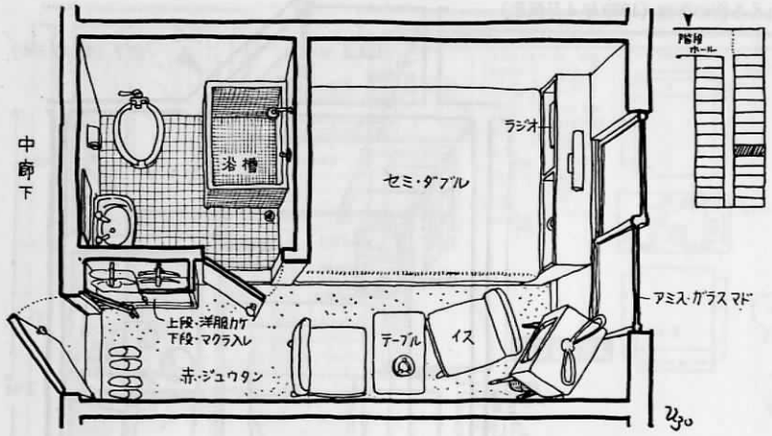


図 16　バンガロー（1952年）　兵庫県各地のレクリエーション地域にたてられたものの実例。

り、そういった機能を連想させるものであった。見た所小さな小屋の群は、そういう機能のものであったろう。

「バンガロー」という名称は元来インドのベルガル地方の、軒が深く出て、正面にベランダのある住宅様式をさすものだが、アメリカで一時この様式が流行し、それがわが国にも一部紹介され、模倣してつくられた。そうしたいきさつから、夏場だけつかう簡単な山小屋の名前としてひろく用いられるようになり、戦後方々の観光地で、地元の人たちや観光業者が安上りの宿泊施設として建てた小屋を、そう呼んでいる。戸板パネルを組み合わせて杭の上にたてあげた書割り小屋のような粗末なものから、かなりガッチリと建てあげたものまで、いろいろある。レクリエーション地域のテント村と同じく、若ものたちの健康な宿営のための「ねぐらやど」といった機能をもつものであるが、このバンガローが、上に述べたような「つれこみ宿」式の使われ方をしている場合が少なくなかった。

図15・16はこうしたものが各地で建てられだしたころ（一九五二年）の二、三の実例を示したもので、添え書の料金は当時のものである。避暑地や海岸に建てるものだから防寒性は不用、七・八・九の三ヵ月間の経営、一年で大体建築費を回収するという。夜具や炊事具なども貸す。アベックの青年たちが夜っぴいてふざけあっている例も多いと当時の新聞は書いていたが、〇〇温泉よりも気がおけないと利用された。バンガローではなくて「パン借ろう」だなどと皮肉るものもいた。

モーテル

戦後のモータリゼイション（自動車化）は、ドライバーの食事をするドライブ・インのほかに、モーテルと称する「ねぐらやど」を自動車道路ぞいに、方々でつくり出した。

モーテルとはモータリスト・ホテルの略語で、モータリゼイションにともなって自家用車あるいはレンタカーで旅をする旅客の宿泊施設としてアメリカで発展した。一九六五年に四・一六万軒、一般ホテルの二倍近くにふえている。ガレージのついた簡素な平家建で、セルフ・サービスのため料金はホテルの1/3程度と安く、車が主要な地上交通機関となっている米国では旅行客の七割がこれを利用するようになったという。

わが国でもモータリゼイションが進むとともに、いち早く五九年に箱根につくり始められてからまたたく間にふえ、六七年には千軒、万博の七〇年には全国で三千

図 17　セミ・ダブルベッドをおく「ホテル」の客室（広島，1968 年 10 月採取）

軒、七三年には更に六千軒にふえたという。各地の国道沿いなどに人目を引く奇妙な形の建物、夜は色あざやかな照明やサインで所在を誇示し、ドライバーを引きつける。しかし勤勉で時間貧乏のわが国では、自動車がふえても旅館にゆっくり休んでというゆとりを楽しむような旅行者は少ない。モーテルは本来の目的から急速に変質し、モータリゼイションと結合した「つれ込み宿」になってしまった。そして、そうしたものの需要の多い都市近郊に多く配置をみるようになった。

旅に出ると大尽気分にひたりたくなる日本人にセルフ・サービスは不向きだろうという予想もあったが、隠密性を必要とする利用客にとっては、これがまた受けたようである。車で遠出のつれこみ宿といってよく、そのようにデラックスな部屋をつくっているものもあり、セックスとレジャーを結びつけた七〇年代の花形産業だなどといわれた。しかし実体はハリボテのバラック建築が多い。土地の高度利用のため、下をガレージにし、上に客室をとったタイプが多く、車を入れるとガレージのシャッターがしまり、翌朝ボタンを押して従業員に料金を払うまでは完全に密室となるような仕掛けが喜ばれ、そういったものがふえた。しかしこのような密室性は、当然犯罪をよぶ。一九六九年一年間のモーテル犯罪は、婦女暴行七二件（実数はこの数十倍?）をふくめて一、三〇〇件に達した。殺人事件もおこった。その結果、客と従業員とが一切顔を合わさないような密室性をあらため、玄関に帳場を設けて必ず面接するようにと旅館業法施行令が改正された[1]。

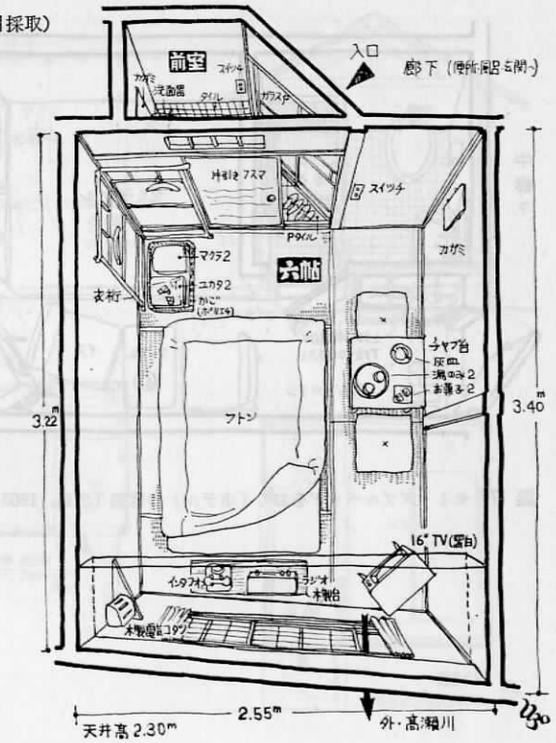
（1）厚生省環境衛生局、一九七〇・七・一六、第一〇一号。なお、一戸建の宿泊施設が多数あるようなモーテルについては、「玄関帳場」は施設の入口又は宿泊者が必ず通過する通路に面して設けてもよいとされている。

サカサクラゲ

そういった、やや遠出の旅行者のための宿とは別に、都市、特に大都市には、前にあげた「つれこみ宿」式のねぐらから直接発展した「サカサクラゲやど」が、従来の青線地区とか、特飲街のなごりをとどめている地区だけでなく、静かな住宅地や景勝の高級別荘街などに忽然とあらわれるようになってきた。

この型の施設をサカクラゲというのは、当初温泉マーク（㊡）を目じるしにつけているものが多かったからで、これをクラゲをさかさまにした形とみたからである。アベック・ホテルとかラブ・ホテルなどとも呼ばれる。普通の旅館・ホテルとちがうのは、旅行者が泊まるのではなしに、その土地の人たちが泊まることである。

図 18　京都・木屋町のつれこみ宿の客室（1969年4月採取）



どこにいっても見つけ出せるが、大都市では要所要所に十数軒が集まってホテル街をつくっている場合が多い。

一泊は午後十一時から翌朝十時まで、そのほかに二時間程度の「休憩」に利用するものが多い。男女二人連れの客が中心だが、単身の男客、一対二の三人連、「商談」で休憩しにくる人もあるという。普通のホテルとちがうのは外観のケバケバしさ、アラビアの王宮、中世の古城、お伽の国の宮殿といったような凝ったスタイルのものが多い。ハリボテの建築であるが、夜はネオンサインや色とりどりの照明で明るく照らし出された不夜城である。入口に料金表がでている。中に入ると、従業員にはあまり見られないような仕掛けで、通される部屋は清朝の後宮、徳川将軍の大奥、アラビアのハレムといった目をうばう豪華な飾りつけで、カラーTV、冷蔵庫（スタミナ・ドリンクが入っている）、三面鏡、ジュークボックスといった備えつけ、ガラス越しに入浴の姿のみえる浴室など、バス・トイレ付きである。中にはスイッチを入れるとベッドのまん中が動きだすモンロー・ベッド、あるいはゆらゆら揺れるシーソーベッド、ゴンドラベッド、四面鏡をはって万華鏡の中にいる思いのもの、さらに空中にもち上る空中ベッドといった仕掛けのついているのもある。[1]

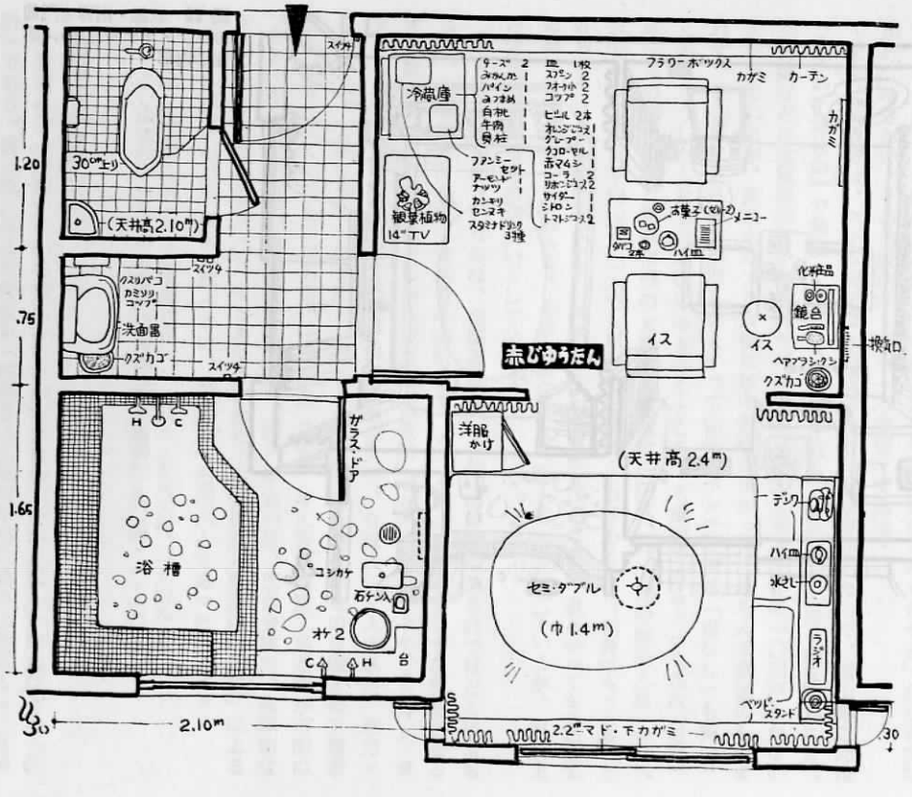
大阪では、生玉、上六、桜宮、太融寺、十三、阿倍野、堺といったホテル街があり、六〇年代の終りころで総数五、六百軒といわれた。京都では、岡崎、南禅寺あたりの閑静な屋敷町にそうした建物が進出してきたので、風紀が悪くなりだしたと感じた地元の人びとが、住居専用地区に指定してそういったものを締め出そうとする反対運動があった。

（1）「田辺聖子の風俗ルポ――アベックホテルの変なベッド……」、『週刊朝日』一九七〇・一二。

ラブ・ホテル

この種の「ねぐらやど」＝ラブ・ホテルが各地でふえてきたのは、自由恋愛式の売春と結びついた利用――つまり局見世あるいは「つれ込み」の現代化した形態だといえる。しかし、戦後は男女間の交渉がぐっと「自由化」したこと、いまひとつはそうした時代の動きを背景に、一方では結婚をしてもたやすく住宅がみつからないとか、せまい住宅の中での雑居・密住といった住宅難・住宅不足の状態、他方では性の解放とプライバシーの要求のたかまりで、満足な夫婦生活ができないという不満足のため、一時のねぐらやどを日常の住居以外に求める――つまり住宅の部分

図 19　京都・南禅寺門前のデラックスなラブ・ホテル（1）　間取り（1969年4月採取）



的な機能を一時的に「社会的」に解決する空間としてあらわれてきたことは見逃せない。

住宅難のはげしい状況では、こういった施設を社会的にもっと合理的に、快適安価に供給するのも一つの政策といえるかもしれない。いや、これをうまく商業ベースにのせ、「産業化」しているのがラブ・ホテルである。客は売春とそうでない客とが半々といった観測もあるが、「まだ足りない、都市人口の二％ほどのベッドがいる」というホテルの経営者がいた。セックスの遊戯化で、アベックホテルは「健全明朗な体育館化しつつある」[1]といった皮肉な指摘もある。二％はどこから割り出したかハッキリしないが、住宅難がきびしく、まともな結婚生活ができない以上は、この種の施設は、住宅難と性解放の時代の地域の必需品といえるかもしれない。このようにみると、「つれこみ」式の「ねぐらやど」も、日本人のすまいの中の欠くことのできない一部分を構成しているといえるだろう。

こうした「ねぐらやど」の中にも、むろんピンからキリまであるが、そのねぐらのプライバシーを確保することが強い条件となり、極端な場合は一時的に全く閉じられた密室になってしまうような方向にすすんでいるというのが、昔のものとくらべて戦後の特徴である。

それらの二、三を紹介してみよう。

図17は広島の観光会社の経営していたあるホテルで、一見したところ一般のホテルの客室とは何のちがいもないようである。しかし、繁華街の近くにあるためか、食堂とかロビーといった設備が全くお粗末で、ただ客室だけの提供である。ヘヤは最小限の大きさの中にセミダブルのベッドが壁にくっつけておかれ、片側からだけしかベッドに入れない。バスルームの造り方が浴槽の外で体を洗う日本人むきにできているのも注目される。

図18～20はいずれも京都の例で、図18の方は木屋町四条を下がったところの繁華街の裏手、旧い花街に近いところで割合に粗末な例といえよう。料金は六九年調査当時一時間三五〇円、宿泊七〇〇円で、変な旅館に泊まっているよりも安くあがるが、しかしこの環境では「休養・睡眠」はむずかしいともいえるかもしれない。便所、浴室は共用となっている。

図19、20はデラックス・サカクラゲがめきめき進出してきた京都・南禅寺門前町のデラックス型の一つで、一見普通のホテルの客室とほとんどかわらない。しかしよくみれば、そのデラックスさの発揮されているところが、一般のホテルとかなり

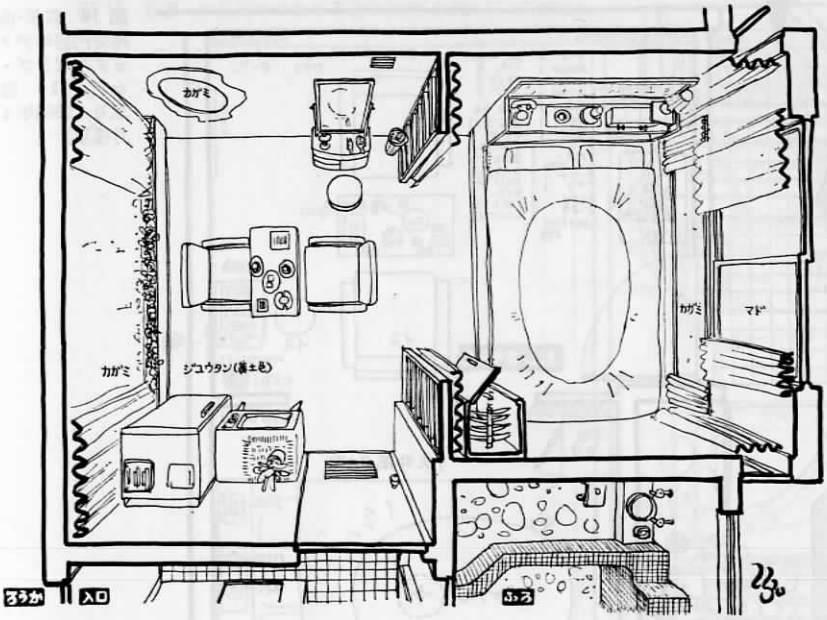


図 20　京都・南禅寺門前のラブ・ホテル（2），客室の内部

変っていることに気がつく。

全体として寸づまりで、ここでもセミダブル・ベッドがやはりカベにくっつけられていること、そして大きなカガミが方々についている。一旦入ってしまうと、外と没交渉で数時間すごせるよう（これは近ごろの旅館、ホテルではどこでも人手を省くためもあって行なわれているが）冷蔵庫の中にいろいろなものが入っている。その中にはスタミナ・ドリンクといったものが大きな比重をしめている。

ルーム・マネーは、六九年現在一時間一、〇〇〇円、二時間一、五〇〇円、三時間一、八〇〇円、四時間以上一時間をますごとに三〇〇円、宿泊（一〇～一三時間）二、七〇〇円となっている。

建物全体の平面図は省略したが、この場合も普通のホテルとちがって、食堂・ロビーといった共用・社交スペースはとっていない。メニューにはビフテキ（一、〇〇〇円）、ランチA（六〇〇円）から和食・おすし・めん類などが並べられているが、すべてルームサービスである。ロビーで社交的フンイキを味わうというより、あまり人にみられずサッと出入りできることが大切で、そのような出入口への配慮がこの種の旅館の利用率を上下する大きなポイントになっている。短時間利用の特別料金制とあいまって、「ねぐらやど」の近代化された型を典型的に示している。

（1）前出「田辺聖子の風俗ルポ」。

木賃宿

娼家ないし、つれこみ宿の「ねどこずまい」あるいは「ねぐらやど」といった、いささか品のよくない特殊なすまいを次々と紹介してきたのは、別に興味本位からではない。「ねぐらやど」は「ねぐらずまい」ときわめて密接な関係があるからである。

都市の最底辺層の最低質の住宅――すまいの型としては「ねぐらずまい」になるが――の集まっているスラム・貧民窟では、住宅はその形式からいうと大部屋に追い込む雑居式のもの、戸別に「ねぐら」が分かれている「長屋」形式、あるいは「戸別建」――といっても、いわゆる一戸建の住宅といったものではなくて、長屋よりもときにはいっそうひどいバラック建の、掘立小屋である場合が多い――といったものに分かれるが、たいていは旅宿と同じく「日家賃」であった。そこに住みつき、時には永住しているといった方がよさそうな人もいるが、住人と住宅とのむすびつきは、旅館的な「しばし」の、あるいは「その日その日」の仮ずまい・「ねぐ